

開催地名：沖縄県石垣市	
開催日時	令和元年 10 月 30 日（水） 19：00 ～ 20：30
開催場所	石垣市民会館
語り部	齊藤 賢治 （岩手県大船渡市）
参加者	市民、自主防災会、市職員、防災関係機関、教育機関等 約 100 名
開催経緯	「明和の大津波」により未曾有の被害をもたらした地震災害の歴史的教訓を風化させることなく、今一度、全市民へ災害に対する防災活動の意識付けをしたいと考えている。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私たちは自然災害の被害を多く受け続けている。沖縄においては台風、北海道や熊本では最近大きな地震が発生し、山崩れ等が起こった。その他、大雨による洪水や地すべり、落雷、雷等が毎年日本国内で発生している。津波の場合の対処法は簡単で、高い所に避難をすること、これしかない。日頃から訓練することで、被害は防げるはずである。</p> <p>「津波てんでんこ」という言葉がある。これは三陸地方で大変有名になっている言葉で、地元出身の山下文男さんという方が講演会等で多用し、広まった。内容的には、津波の際はそれぞれが逃げようということで、みんなが逃げていることを信じ、自分もその場から安全な場所に速やかに避難するということだ。この言葉の由来は、明治 29 年の大津波にさかのぼる。このときの大津波での被害は、地震自体は震度 3 程度だったため、津波は来ないと油断して誰も避難しなかったことによるという。そこで生まれたこの言葉には、1 人でもいいから助かってほしいという悲願が込められている。しかしながら、東日本大震災においては、「津波てんでんこ」が守られなかったケースが多数みられた。家族を待っていたり、探しに行ったりして、逃げるのが遅れてしまったのだ。</p> <p>（2）東日本大震災の被害状況</p> <p>東日本大震災発生時、大船渡湾の堤防は全て破壊、粉碎した。水の進行方向へ向かった車は助からなかった。対策としては高台へ逃げるか、Uターンするか、乗り捨てて高台へ逃げるべきである。車は水深 30 センチメートルもあれば危険である。津波の知識が不足していた方や、家にもものを取りに戻った方などが被災した。自分だけは大丈夫という心理学用語「正常性バイアス」が働いた。逃げない方法を探してしまう、認知的不協和も働き得る。また、一晩中寒かったため、高齢者は低体温症も発症した。</p> <p>避難動向のグラフによると、犠牲になった方の約半数は自宅にいて逃げなかった方だった。また、行政が指定した避難場所でも犠牲者が出た。津波は家を簡単に流す。遺体安置所では、水死体より圧死体が多かった。震災後、電気、ガス、</p>

水道などのあらゆるライフラインが断絶した。私の場合、風呂に入れたのは発災後 10 日経ってからだった。

(3) 最後に

震災後、困ったことはまず水である。そして2つ目に食料、3つ目がトイレである。さらに贅沢を言えば、ガソリンや電気、ガスといった文化的なものばかりの要求になってしまう。とにかく、震災直後からサバイバル生活が続いた。

人間、黙っていても 1.5 リットル以上の水を体に取り込んでいる。震災でライフラインが断ち切られたケースでは、水は一人あたり最低3リットル程度は必要である。今回、私の居住する地域に給水車が来たのは、震災から4日後であった。地域によって異なると思うが、水の備蓄はある程度必要だろう。

カセットガスコンロ等のアウトドア用品や作業着は役立った。また、水の運搬には、一輪車が大変役立った。古いエンジンを有した発電機の回転を改良し、ランプ、テレビ、洗濯機に使用した。これには、ある程度の知識と技能が必要であるし、工具もなければならない。また、普段から生活水量を把握することも大切である。災害発生時、トイレは水に限りがあり、雨水を溜めてる過し、沈殿させて使用した。

私たちの地域では、震災直後から食糧が不足した状況が続いたが、食料をみんなで分け合ったりして、当座をしのいだ。これは、普段から近所の皆さんとコミュニケーションが取れているから自然にできたことだと考える。災害時は、公的機関の援助を得るまで時間がかかるので、近所の皆さんとの関係が重要になってくる。皆さんも是非、地域でのコミュニケーション、連携を大切にしていきたい。



開催地より

東日本大震災のすさまじい映像や実体験に基づくお話に非常に引き込まれた。津波の恐ろしさについて認識できたと思う。自主防災活動の重要性を強く認識できたと思うので、今後に活かしていきたい。